

した学問を修めると同時に、漢詩も作りました。それは漢字・漢文を深く理解するには、中国古典全般に通じていなければならず、学問と芸術を峻別することはそもそも不可能であったからです。

ただし、漢学のあり方は荻生徂徠が登場する一七世紀末から一八世紀初めを境として傾向がかなり異なります。前半は、朱子学、反朱子学いずれを標榜するにせよ、学問を探究しようとした儒学者が多いのに対して、後半は、詩文を主とする、いわゆる文人と呼ばれる儒者が多くなります。

### ●徳川家康が儒学者を重用する

歌道で有名な冷泉家は一四一六年に次男が分家し、下冷泉家と呼ばれましたが、藤原惺窩はその家系の次男として生まれました。現在、冷泉家として京都御所の北に住まうのは上冷泉家です。

名は肅、号は惺窩、姓は冷泉ではなく、本姓である藤原を名乗りました。長子ではなかったことから、京都の相国寺に入り、禅僧となって朱子学を学びました。そして、朱子学を基調としつつ、陽明学も受け入れるなど、それまでの五山僧の教養の一部として学ばれてきた儒学を体系化して、京学派を樹立させました。朱子の新注に基づいて四書五経に訓点を加え、近世儒学の礎を築きました。また、和歌や日本の古典にもよく通じていました。豊臣秀吉・徳川家康にも儒学を講じており、家康からは仕官することを要請されましたが、これを辞退し、代わりに門弟の一人林羅山を推挙しました。

林羅山は名を信勝、出家後の号を道春と言いました。幼い頃から秀才の誉れが高く、京都の建仁寺で学びましたが、出家せず独学で朱子学を学びました。一六〇四年に藤原惺窩に師事し、翌一六〇五年には徳川家康の政治ブレーンとなりました。その後、秀忠・家光・家綱に儒学を講じ、一六三〇年には上野忍岡に学問所を与えられました。これは私塾でしたが、後に湯島に移されて幕府直轄の「昌平坂学問所」（一七九〇年設立）に発展的解消され、以降朱子学を基とする儒教教育が公的に行われることとなります。その訓点は道春点と呼ばれ、古雅な趣を持っています。一六三五年には「武家諸法度」を起草するなど、幕府の制度や教学に深くかかわっていききました。

### ●藩校や私塾が設立される

幕府の一連の文教政策は諸大名にも影響を与え、各藩に藩校が設立されました。ここでは、朱子学を中心に講じられましたが、その教官によって陽明学や古学が、幕末には国学や蘭学が講じられることもありました。このような学問の奨励によって、全国に多くの学者が輩出されることとなります。

ちなみに、主だった藩校に、米沢の興讓館、会津の日新館、仙台の養賢堂、水戸の弘道館、金沢の明倫堂、尾張の明倫堂、紀州の学習館、長州の明倫館、福岡の修猷館、柳川の伝習館、熊本の時習館、薩摩の造士館などがあります。また、藩校ではありませんが、備前の閑谷学校（一六六八年、岡山藩主池田光政の開設）

は武士だけでなく、一般庶民の子弟も受け入れました。

このほか、私塾や家塾で、儒学を講義したり漢詩の作詩を指導したりする人も少なくありませんでした。代表的な私塾としては、京の古義堂（一六六二年に堀川に開かれた伊藤仁斎の家塾）、大坂の懐徳堂（一七二四年に陽明学派の三宅石庵が初代校主となった学問所）などがありました。私塾にも儒学以外に、国学、そして蘭学・医学など、さまざまな分野の教育を行うものが江戸時代中期以降出現しました。藩校が硬直化する傾向にあったのに対して、私塾は向学心に富む人たちの熱意に支えられた自由闊達な教育機関でした。吉田松陰が萩に設立した松下村塾は、藩校に入れないような下級武士の子弟を中心に教育を行い、わずか三年間開かれただけでしたが、その教えを受けた伊藤博文・高杉晋作・山県有朋など、明治維新を推進した人々を輩出したのは周知のとおりです。

### 3

#### 唐通事・黄檗僧が活躍する

##### ●長崎が唯一の海外貿易港となる

一五七一年、ポルトガル人が寄留する場所として長崎が開港されました。一五八八年には九州を平定した豊臣秀吉がここを公領とし、一六〇三年には徳川家康が長崎奉行を正式に任命しました。

明との貿易は織田信長・豊臣秀吉の時代にはほとんど絶えていましたが、一六〇〇年に明の船が長崎に來航するようになった後は、明との貿易も復活しました。しかし、一六三五年には寄港地が長崎だけに制限され、さらに、一六三九年には、オランダ人・中国人との通商以外は禁じられることとなりました。一六四一年には平戸のオランダ人が長崎に移され、長崎だけが唯一の海外貿易港となりました。一八五四年にアメリカなどと和親条約を結ぶまでのおよそ二一〇年余り、長崎は「崎陽」もしくは「瓊浦」と呼ばれ、外国文化の唯一の窓口として、幾多の文化人が訪れる所となりました。

##### ●唐通事が長崎に置かれる

長崎は海外貿易の管理、海外情報の収集などが行われる地ですから、そこには当然通訳が必要となります。その通訳に従事した役人として、オランダ語の通訳官のオランダ通詞（蘭通詞）、中国語の通訳官の唐通事（唐通事）がいました。「通詞・通事」ともに「つうじ」と読みますが、表記が異なります。

唐通事は、一六〇三年に馮六（ひょうろく）という中国人が初めて任命されました。一七世紀初め、明が国情不安定であるため、多くの中国人が亡命してきました（一六四一年には明に代わって清が建国されます）。中には学芸